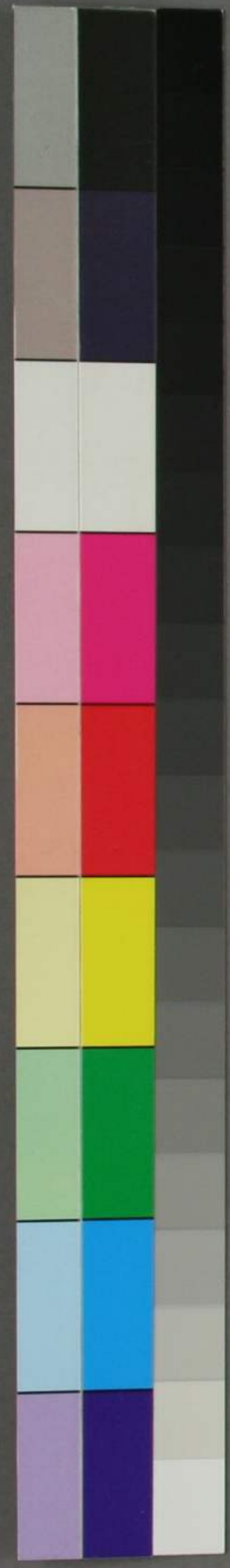


近藤三鎮
母親の心得

下篇

78
3464
2



門 78
 號 3464
 卷 2



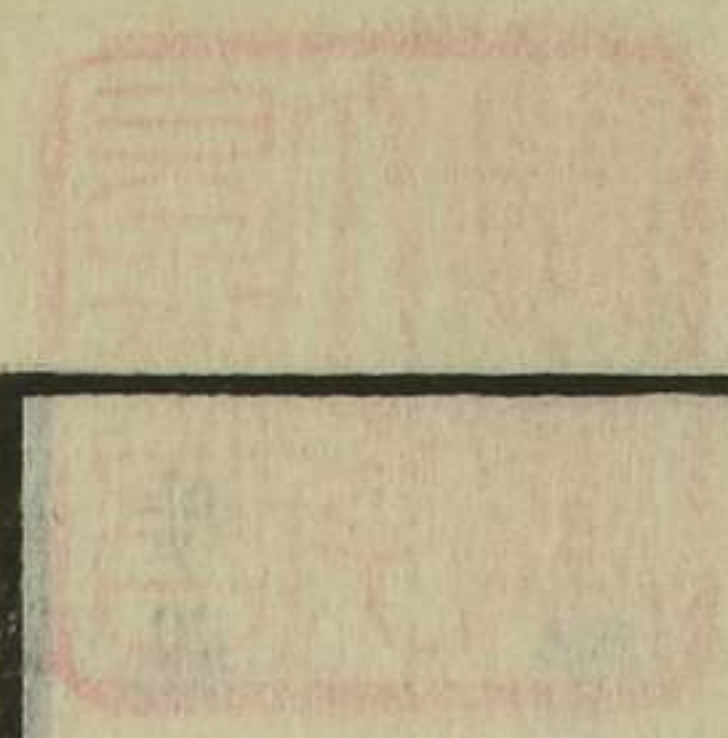
の心得下篇

目録

智恵の發達并ニ五官の作用	一丁
智恵の發達と助くる事	二丁
小兒の遊バセ方心得	七丁
言語の教へ方	九丁
思慮の力と進む事	十三丁
母親の教へ方并ニ學校としての教へ方	廿二丁
讀書の事	廿八丁

母親の心得
 下篇
 目録
 近藤代蔵

早稲田 大學 図書館
 昭和 34. 2. 12 受
 藏 書



母親の心得下篇

近藤鎮三 譯

○智慧の發達并五官の作用

○初生の小兒はいまど智慧の了簡もなき者なれども人間より元來智慧の機關具りあるゆゑ月日を経るに從ひ次第に英敏ある者あり抑も人間の頭腦はその靈魂のやどる場所あれども初生の兒の頭腦はまど成就せざるが故に生れて三四ヶ月を過るまでには知覺も了簡も發するを得ず恰も夢中の人の如く只其身體は激しき

感動あればこれ不應ぢる反動を爲すのみ固より快きも快からぬも知ることもなく内外の苦痛又ハ食物を求むる時に泣きけがのみ是とて其苦痛と訴んとするの真意より發せらるゝのあらず生れて二三周より初月を過る頃又至りて精神の感動と起るに似たることあれども是又五官の感動にして眞又精神より發せらるゝものより凡ハ五官の感動を始むるハ早きものにて其作用神經は傳て精神を感動せしむることあり○凡と五官の作用ありと腦より各部を通ずる所

の神經の所作あり目の物と視耳の聲と聞舌の物を味ふあど總て身體の作用ハ神經の致す所ありされども生れて凡そ一年間の神經の作用も足らなく頭腦并又脊髓全成せらるゝに従ひ其作用鋭くありて見るもの聞くものみつき其何なる由と分別し得るも及ぶあり腦が全身を支配し得る程は成熟せらるゝハ六歳より八歳の頃にて智慧を開き自ら思慮と起るハ此時より始まる
備て母親ハ小兒を育むに諸事よく意を用て

母親の心得 二 近藤氏蔵

其為べき義務を盡さば其返報より小兒が健康
 小成長し且智慧も次第に進むと見るの幸福あり
 り小兒の始めて笑顔とあはれ其母と知る徴なり
 り手を動かし母と取つき聲を聞き知り喜び
 て勇立つ等の舉動と見れば他人をういと愛ら
 しく思ひて止まざりものなり況てや其母親の
 心の歡しきこと幾何をらん斯の如く小兒の
 健康も成長し智慧の進むに従ひ夫婦の間益
 睦しくありものなれば生涯の幸福の母親が小
 兒を愛育するに基きりものと云べし

精神の教育は小兒の成長の度と量りてられと
 為しべし母は小兒の意見心情と造る者として父
 母の教へ込る意見心情の略備られる者又
 學問と禮儀の道とを教へて益其智慧と進出
 者あり兒と育つる者の前後と論せし父は母の
 後にありされども又母の耕しる良田も父が
 良き種と蒔ざればよき果實を得ること能はば
 されば小兒の教育は父母の合カうて始めて完
 全きものものと云べし
 前文の事左の如く耳新しき理よりいふ既に

往古希臘羅馬の世は小兒の教育は母親の大切
 なる仕事なりことを當時の學者も論じたりき
 又實は當時の名高き人々も附て其例多し其一
 二を云ふとセーサルの母のアウレリヤ又アウ
 グストスの母のアチヤの如く何れも賢婦より
 て其意見心情を以て其美性の小兒を育ぶるよ
 り此豪傑を作りたりこと疑あり

○小兒の智慧の發達を助くる事

○夫人の身體はそれと適當なる滋養ふきと得ず
 精神も亦然なり小兒の身體を養ふ始は極て淡

泊にして消化し易き食物を要す小兒の精神を
 教育するも亦是と同じく淡泊にして慣覺や
 る且理解し易き事より始むること肝要あり
 先づ物と教ふるは其實體を見せし是を會得
 せしむべし母たるもの心情として其兒の餓
 て乳と飲んとするを意とせぬことあり今小兒
 の智慧つく時は當て其發達を助んと思はざる
 こと亦決してありべからば是を教へ其發達を
 助るより面倒なること多しれども必だ厭ふべ
 かりし小兒の智慧發達を始は先其母親の顔を

見知り聲と聞分けて其居る方に目とつけ又其目の先は物と動かせば其行く方と見又の掲けよ時機の鐘の聲と聞知る等のことたり諸斯の如く智慧つく頃又至らば物と見せ聲と聞せて成丈け其耳と目とと慣らすハ精神と教へ育る始めの最要ある術ありされども食物も過まば胃腑と損ト消化を妨げ終又成長の害とふると同理りて精神も亦餘又勞せば自ら衰弱して智慧の發達を妨るハ故又小兒と急速又智慧者となさんとしてせば却て其腦力と弱く又ハ腦病

と起きしむることろり通例幼穉よりて餘り智慧あるものハ成長して愚鈍の人に變ぢること多し
 母親ハ小兒が乳を飲んとして其容體を爲す程の智慧已又發する頃又ハ先坐側に有合ものを指してられと教ふべし其視る品物の成丈單純にして且醜かぬものと擇ふべし長く見せて居るハろく又彼是と餘り種々の品物を引更て視るハ疑惑と發すの基にく宜かれば小兒ハ智力淺きゆゑ強く教んとせハ其心氣と勞を

ること甚し備て見むる物の形又聞する響も清
 快ものと擇び成丈善美ものを用ひて善良の心
 情とありやうありべし先音曲ハ調子の整ひと
 るもの畫紙の類ハ小兒の愛すべき色合のよき
 もの形よき品物静ふる話一方を用ゆべし小兒
 又向ひてハかりそめにも悪き顔とふさぐ悪き
 言と吐かず又喧嘩口論等の粗暴き事と慎むべ
 し皆小兒の精神ハ害あり小兒の智慧と開く為
 に見せて教ふる品物ハ先づ家内ハ有合ふものと
 用ゑ漸く又戶外ハ出く種々のものと見せ次第

にその分別と教ゆべし而して奇怪のもの見
 せず奇怪の話ハ聞せぬと良とき小兒と教ふる
 ハ先第一物の形と知らしむること肝心なり譬
 ハ圓き盤と四角の盤との異形を示し又平圓形
 と球圓形との類と見せそれより日用の茶碗皿
 鉢等と出して其名と教へ戶外に出でハ園中
 の草花小石等の名と教ふべし耳目の作用と發
 きしむるに法あり小兒ハ目の力遠利りハ初ハ
 遠近の區別と知らん月星とも手は採んとし又
 物ハ我の面前にありと構ハむしと前に出んと

世辭の心得

下篇

近藤氏藏

も音聲を聞き亦斯の如くされば其作用とひき
 發すこと肝要あり先内外と論ずる處と定め小
 兒の預て好む品物と据置て之を目的とし母親
 の小兒を抱て其目的を指して近よるべし、さす
 る時凡そ何程の距離より其品物より小兒の目
 につくると知べし又其翌日又至りて前日の如
 くせば此度の其距離や、遠くと目又つくべし
 又次の日又其物を取替て距離もや、遠くと
 べし又時として、母親自ら遠方より小兒又向
 て進み寄ふどのこと、視力を強くするによき

方法あり聞カも亦これと同譯ゆゑ常々聞馴た
 る音聲と近より次第々遠く隔て早く聞つくる
 なりに慣らむべし

○小兒の遊ばせ方

○夫々遊嬉ハ小兒のときの勤にして母親のよ
 き訓導は因らばそれ事業と運動との助とある
 べし小兒の遊嬉ハ生て四五箇月と過るまでハ
 さまで肝用もなく唯母親の考にて小兒の害
 とならべきこと又ハ氣儘に成長を妨ぎ驕
 横ある心の起ぬなりに育ること緊要ありや、

成長して後、此方法を以て智慧を開くを得べし。如何者、小兒の成長するに従ひ品物と玩弄つ、何時ともなくその品物の性質までも識別する智慧を發せればあり。

遊嬉ハ小兒の心と樂しめ且つ其玩弄品物を知らむる功用あり。玩物の折々よりかへて與ふまば小兒の心と喜ぶこと愈深し。何時も同品をまば小兒ハ其奇しかりぬより厭て喜ぶ終に毀して其形の變るを喜ぶ。是ハ其毀を好む。非ぞ其品の形の變ると見んとしてあり。

故に小兒に與る玩品の堅固のものより種々に變ぢるものと良とす、されども餘り毀れ易き品と與ふまば其毀ることを面白く思ひ何品によりて打碎んとするの思念を起さなり。又これが為に手足を傷る怕あり。母親ハ種々の玩品を數多く貯かき時々とりかへて與ふべし。然るれば小兒も悦び種々の物品を覺ゆるの益もあり。小兒成長して其智慧漸進まば我獨遊て満足せむ。我と同位の年齢の小兒と交りあふることと好むものゆゑ。此項にハ善兒と集て交遊む。

一むべー○母親并傳婢のよく意して小兒の前
 まで害とあるべき危事となさば又小兒の遊居
 る傍に火或の楮附木の類を置くことを禁むべ
 一往々是等より大害と引出せしことあり
 偕て小兒其同胞又の遊朋友と交り遊ぶ頃母
 親の能く氣を配り苟且に禮儀を害するやう
 のことあらば嚴しく制してこれを止むべー又
 男女の其遊方別あるべー男兒は男の遊と爲
 一め馬を乗り車して走り操兵の遊の類女兒に
 一女に適へる遊を教へ専ら家事と調理る事に

慣一むべー男女打交りて遊ぶ時の男の女に向
 ひて物柔ふる振舞を為ことを教ふべー不潔の
 遊の禁をべー身體衣類の汚穢を厭えぬやう
 になれん終る其精神も自ら汚穢とふるなり
 右に説所の只遊嬉の小兒を養育するに肝要な
 る事と云ふのみも一其遊むせ方の如何と知ん
 と欲め夫の有名の教育家あるフレイベル氏
 の著せる幼穉園の書あり就て其要を求むべー
 ○言語の教へ方
 ○小兒の其意と他の人に通ざるの始の容を以

て来ること 獸類の頭尾ともて應對するに同
 其譯の小兒いまだ言語を知らずの智慧なき
 に由てあり次第に智慧を増し心意發するに従
 て母の發言と口の動方とに氣附け漸く其まを
 真似て終に發語と知り而も其意味さく何々の
 譯あることも自ら會得し時に望て其語を用る
 りいづるの造化の奇妙と謂べし而て發語の
 類に限りて天より特別に惠まれしを幸福あり
 小兒單一の五音を發し得るの耳の聞え始る期
 あり 話の固語と組立たるもの又語の數多の

音の集りて成るもの也小兒に話と教るに
 先つ五音より教へ漸く話に及をべし小兒の母
 の言ふことと聞き真似て次第に言語と習覺也
 るゆゑ生ながら聾のものことと學ぶに由る
 く終に啞とある啞者の發音の機關具はまども
 耳の聴えぬより發音と習ふことのみならず
 に然る者多し耳よく聽得て發音の出来ぬもの
 は是れ全く發音機關の不具なりゆゑあり○聾
 啞は學問と教るの術種々あり殊に啞者に發音
 と教て平人の如く自由に對話せしむるの方法

近年の發明にて最調法なる工風あり○偕て
 小兒の母親と互に其思意と通をる期に至まば
 母親の顔色、目遣などの様子より其愛をるる叱
 るりと察をること甚疾—又其期にハ母親も其
 兒の容子と窺ひて其思ふことと察して違ふハ
 母と兒とい斯の如く自然に其情とよく通し得
 ること速かれハ言語と教るも容易く又習ふも
 甚ど速くあり始め又ハ真似し易き小兒の言語
 より教ふべし(小兒の言語とい譬ハ食物のこと
 をウマく手の事をテ、と教ふの類と云ふ)但

綴字の句をよく切て物名ハ其實物と指て幾
 度も繰返し話せば—さそれハ小兒ハ發音と習
 覺へ且其語の譯と知るべし其語ハ「ム、ブ、グ」等の
 唇の音と以て始るものハ言易し
 小兒の發聲ハ其思意と自ら云ひ出をの初めれ
 バ教どと出来るものより即ち食物と請ふて泣
 き又ハ叫ぶどられなり之と自然の發聲といハ
 生まて六ヶ月程も過て智慧漸く進まハ思意と
 云出をに他の工風と用ひ己々心に適時ハ悦で
 笑顔となり又其心に逆時ハ號泣と等の容子と

かんに至る是皆其思意を他人に通し示すの工
 風或ハ術てにして之を形容話しとつ小
 借て頭腦完全まなり智慧進むに従ひかの形容話
 ハ言語と入代りて終に止むあり○小兒ハ他人
 の話を聞き覺ゆることの早きものゆゑ二三の
 言語と覺ゆれば暫時にその數多と習ひ得て何
 事とふく頻りに對話たそれども思意定まらぬゆ
 ゑ一つの話を終らばして他の話に移り彼是紛
 雜まして取留めあり其思ふことと具そに他人の話
 一得るハ智慧進み十分の思想しといふす頃より

遙々後日のことなり○小兒の話を頃々ハ智
 慧の發達殊に迅速よりて母親も意外のこと多
 し、さればよきことありきことも習ひ覺ゆる
 こと速かなるゆゑ母親ハ能く注意して發音の
 訛ま言語の不正ま又ハ語路ろの前後并び野卑いの語を
 交へて話をことなうるへ小兒の言語のあり
 きハ聞きぐるべく母親の不注意まより來ること多
 一小兒ハ只他人の話を聞き眞似まするものよ
 て素より其善惡よの分別なけば母親又ハ傳た傳た
 の言語正まけまば即ち正まき言語と覺え惡よければ

悪きと學ぶ但し幼少の時に覺えたる語訛の成
 長の後に改むることか「言語の誤に二様あり一ハ發音の誤より例へハ（日本文字の）灰を
 へいと誤り火をいと訛るの類是あり又一ハ言
 語用法の誤にして俗語にハ往々其字義を誤り
 て不當に用ふるものなり
 又連續せる一話則一文章の中にハ大切なるテ、
 ニ、フ、ハと誤るあり是を總して言語の誤あれバ
 始より是等のことなき様は正しく且明了に教
 ふることに緊要あり母親ハ小兒に言語を教ふる

よハ其正しく話し得るまでハ幾度も繰返して教
 ふべし、も一小兒ハ座傍の玩品と取らんと求め
 バ先、其名を云きさせ、よくこれと云ひ得ると待
 ちて而して後ち取て與ふべし又畫本の類を見
 せて其中に畫ける鳥獸草木類の名と教へられ
 と言ハしむると良きことあり斯の如く單語よ
 り始め既に短き話とあり得る頃より短くして
 覺へ易き歌と教ふべし歌ハ文章の接續并は口
 調善良ければ記憶をに易し
 ○思慮の力と進むる事

○凡そ思慮といふ物事の理合と彼是と比較してこれと心に會得せらるると云ふ成人よりして心意散亂して考の淺きものなり、又早解せらるる似て實の思慮の足らざるものなり、是等の抑も何の爲に斯の如くなり行くものなり、夫も人の身體も使役ことなく且剛むることあけまば怠惰柔弱とあること必せり精神も亦右の理合と同しく考力を使ふことなれば進むことあく必き愚昧の人とならば其作用の英敏ならんことと要をれば適宜にこれと使用すべし、兒童の

時に此事なくして壯年に及びて俄に思慮と出さんとなをも決して能はざる精神の適宜の使用といふ即ち物事をよく思慮せらるることなり母親の兒童の思意の力と引起ことと勉べし前又言ふ所の成人よりして思慮の鈍い兒童の時に母親が其心育と怠りたる爲に然る者多し、この教育と怠り其時と誤らば後日良師も其智慧の鈍きを如何ともせざるなり如何程勤學とあすとも其不足と補ふことと能はざらん、夫も智慧と知識といふ別事なりよく物を習ひ物

名と知る小兒と智慧ありと云ふは甚だ誤り
 只學問のいふては無活の器具に同ト無活の器
 具と集列して如何程多く所持せるとも只他人
 の耳目と悦ばしむるなり自ら廣く諸物を比較
 し其異類の理と考ふることなくば少くもこま
 と活用せらることなし十二年の兒童の好んで
 奇品珍器を集めよく其名とも知るものなれど
 も其物品の成分より性質を知るもの稀あり其
 故に兒童の思慮尚いまだ足ざればなり
 小兒の體育ハ母親の導きによりて如何にもふ

るゝ如く其心育も亦其導き方善ければ早く思
 慮を起さべし思慮ふけまば事物の道理を辨知
 し其關係を知るを得るに備て小兒のいまだ思慮
 なくして只其心は浮むことと言ふ頃には母の
 特に意を用ゐ其思慮に誤謬なきやうに教へ導
 くべし但し小兒の心情は自ら母に似るも
 のゆゑ母の責輕かからば母親ハ小兒ある物と見
 るに能く其形體と性質とを察しこれと他物
 に比較し考ふるやうに仕向くべし是等のこと
 ハ母親の才能又ハ傳婢の識力と要するも及

が、只専ら愛育の情と公明の心と以て教導を
るを肝要となすのみ母親が真の情愛と以て教
へ導くが六ヶ敷方法を用ずとも教育の真意と
誤ることならざるべし

小兒を教ふるに或る疑問と設けて其事理と思
考せしめば終に其疑を氷解し自定の心と起さ
べし思考の注意より始まる注意の反対の放意
あり(放意とは或る一事に心を向けさ)されば放
意の思考と妨くるものなり小兒の或る事物の
内外の形質と思量して其思量せることを記憶

せんと欲するやりに仕向くまの注意心と起さ
ものの多疑問と設くるも意思と起さるべき事
柄と以てし且其疑はき事柄と他物に計較し
てこれと辨識するやうに教ふべしこれと教ふ
るに譬の先つ石と見せて其他物と異なる所を
説き示し後に畫本に就きて兒童の石投の畫を
見せ此石の先きに見たる石なりと教へ示し又
家と建つるに此石が肝要なり杯石の要とも
教へ示さるべし、さて其後小兒と伴ひ戶外に散歩
し道路ある石を指して尋ねべし見よ是まの

何物なりやと又小兒として其物によく注意せしむる爲め尚其上に「この石の如何に美うらみや」と氣を付け、さて母親の自ら其石を拾取めづらぎ小兒として心よりこれと拾めづらんと思立しむべし斯くすとも尚も拾めづらんとすの心を起さず、また「やよ其石を拾ひて能く見よ」と心附くべし、これと拾取たれ、其形かたち色堅かた柔な輕かろ重おも并なら其名稱等と尋ねべし而して此石の何處どこに産うまるとり又何の用にあつらう又これを以て何を造らうと教ふべし且先きに畫本に見たる石も是あり

投けて中らば人を傷たまへべし又其投げて落おるの如斯ごとの理合あり又石を以て家を建たるに斯ごときなりと石を就きて起る種々の事柄を教へ示さべし而して母親の石と他の物とを比較して其物質の差ち異いと説き示さべし斯の如くせば小兒、其教へ方の面白さに自ら新に物を見出してそのことと問ひ聴きんと欲するの心を起さずあり是を思慮を進め理解をよくせむ爲めの演習あり備てこの演習の間、考が外事に散り消さるゝなどの妨さ碍がいを防ぎ置くこと肝要なり、也

一演習の間に他の物々邪魔せし今折角に心を
向けしむる石の話も忽ち他に移り思慮の向きの
一つの物石の事よく歸着せず一つの本と云ふ
所の意思を造成して其物の性質及有様をよく
心の中に覺ゆること能えし、この其間に其物を
他のそれに類似するものと又全く異なるもの
とと静ま心の中に計較するを得ざればなり今
爰に例に用ひしむる石の思慮を起すの原素に
てこれと比較する他物のこの原素より生じる
性質ある重さ堅き其形并に利害等と知り究む

る爲めに引用せらるるものなり、さてこの石の
性質有様と極むる爲めの比較に引用したる他
物例への動物の類植物の類の別固有の性質
有様と具するものゆゑ又新に思慮を起すの原
素とあるやうて斯の如く或る物と他の物と比較
して極めたる思慮を決着とつゝ例への石の性
質を極むるにこれを樹木に比較して考ふまは
木に枝あり葉あり年々に成長せしむる石に
はこの性質なきれば石と木との全く別物な
りと定め決するが如く以上のことへの性理學の

性理學の心得 六 近藤氏蔵

論ハ涉るをもて解し易らばさきて母親ガ或る
 一物と採て教めり時に小兒の心が他の物に紛
 き散りておちつらざれば強てられと責めどま
 つ其心と紛らすもの他にあると見出してこ
 きと除き去らば些少の物に心の轉ころことあり
 例へば坐右に蠅の群りたるあり又ハ壁の漆或
 ハ母親の衣装の美やうなる等又因ることあり
 斯く小兒ハ他物に心と奪ハき餘念ふけまハ母
 親ハ暫く前の話と止てそのものに附きて更に
 話と始むべしされども兒童の心の然あらぬに

ハ其話を半途に替ることさらさきて小兒ハ幼
 きほど勞つと且倦易きゆゑかの思慮の演習も小
 兒ハ倦屈せる様子なれハ早速に止むべし又母
 親ハ小兒の倦屈することふきやうに物事と教
 かるに其理合と面白く解き聞きすこと肝要な
 りさすれば小兒も飽あことあく自ら其理合と質
 問し且思慮するに至るべしされば先づ一つの
 物に就きて話を起し種々のものと引合に出し
 て解きさきて小兒とて其引合に出したる最下
 のものより話と起したる前の物に立歸たて其譯

と問べし例へば樹木の枝あり枝に緑色の葉
らり木の葉の風の為めに動かし風人の目
より見えねども皮膚に覺ゆるなり又其作用
の樹の葉と動かしを以て知るべし斯の如く話
し置きて後に樹の葉の動くや何物に動かし
や又木の葉の何色なりや葉の何に着きてら
りや枝の何にして又何に屬するやと問ひ尋
ぬべし凡て容易き事柄より次第に進みて物の
色合性質等と教へ其後の物の關係を思慮する
ことと教べし物の關係とい其物のある場處の

世親の心得 下篇 二十 新録紙藏

模様高低數量尺度大小等と云ふなり數のこと
の先つ坐傍に有合少品より木片より實物と
算へ二つと云ふ數のこの一つのもの他の一つ
の物とを斯く合せたる數あり此錢と彼錢とを
合せば則ち二つと云ふ數の錢なりと教へ後ち
に若干の錢を積み小兒に向ひ吾に二箇の錢を
與へよと云ふべし斯くして教ふまば早く物
の算へ方を覺へ且つ次第の思慮の力強くあり
て物を見ざとも心に計得るに至る凡て母親の
是等の事と話し教ふるに氣長にして耐忍と

世親の心得 下篇 二十 新録紙藏

昔と一小兒り疑しきことを問ふと懇^{まこと}に其譯を
 説明して倦ことなく且苟^{うま}且^まも偽^{いつはり}あるべ
 らば母親の教ふることの不正なるを知らハ次
 第二母親を疑ひ教育に害あつべし此故はも
 答に差支へし時ハ偽を教へんより却て明々に
 其譯ハ吾も亦知らばと答ふるに如らず又「其事
 ハ未だ汝にハ解^{わか}すべからず成長せば自ら解る
 べし」と云ふも可なり又一且約束せしこと杯ハ
 決して違ふべからば小兒ハ智慧あき動物と異
 なり母の教育に因りて善ともなり惡ともある

而も母に能く似るものも多母が輕薄^{かろそ}かれハ其^{その}
 子も亦輕薄となる兒童を育つる者よく意すべ
 きことなり
 諸て右に於て思慮のことを述べし此は又記
 憶^{おく}のこととて説くべし記憶ハ矢張演習によらさ
 まハ其力と強くする能はずこの記憶力ハ目
 視^み耳^{みみ}は聞く物又限らず思想の記憶事情の記憶
 等^らり記憶の強きハ物或ハ事の初めて已まが
 心裡に感^{かん}ぢの勢力と思慮の強きとに由るふ
 り記憶力を強くするにハ先づ母親が或る事物

と以て小兒の豫て知る所の事物を思ひ合せ心に
浮うまゝましむるやうにならば小兒が既に忘る
たることと復習せしむるの益あり其心裡こころの
よく覺りて今目前に思ひ出さぬことと遠とほ廻まわ
に思ひ出さしむべしされど小兒ふ解しかたき
こと又ハ記憶し難きことと屢々復習して強て
教へんとせむべからず文章又ハ詩歌の全文と句
分けして其各句の意味と説き明し後に小兒と
して其全文と復習せしめ且暗誦くらんせしむるも宜
し記憶ハ演習によりて強くあるものゆゑ母親

がよく教え込められその力弱く小學に入りて
暗誦の難きと困却くわんせむべし○記憶ハ一旦覺えた
る事を忘れず再び思ひ出さぬことなれば記憶の
力と強むる爲めに彼を是と種々の事を混まじ
又理解せざる事を暗誦せしむることより是
等の事を暗誦せしむるとも只に心は銘記めいとハ真
の記憶にあらず又多くの事を一時に記憶せし
めんとせば却て小兒の記憶力衰弱まろき
○私宅と學校との教育は就て大なる感能ある

ものより即ち母親と教師の小兒の智慧を進むる重任あり私宅より母親が智慧を開くの基と作り學校よりの教師が母親に繼ぎて愈よられを進むるものなりまづ私宅よりの愛を以て教へ學校よりの規則を以て教ふることに肝要あり五六年までの小兒に學校の教え方の益少すくし此年齢までよく母親が教ゆべし小兒成長して學校に行く頃になりても母親の學校の課業と助け教師の届らぬ處を補ふべし偶小兒を私宅あり自め教えんとする親あまじも是まの

宜きことより假令母親が如何程の學識あるにもせよ小兒を教え育つる一つの術として易きことにあらず且私宅にて學校の如く規則立ちて教授すること叶はば又もや母親が誤解して教ふることにしるば小兒の爲めに害ふること勿論なりされど必非とも私宅より教えんとするが母親先づ自ら此術に熟むることと心掛くべし母親が小兒を手放して學校に通はしめば行儀らしき小兒に交りて惡きことと覺え且學校の數多の小兒と一時に教ふるが故と

必ぞ教授も行届りトと様々のこしを思ひ過し
 私宅に教師と雇ひて教ふるに如くことありと
 思案をらものり是等の無益の思ひ過をな
 て學問の進みと妨くると教え方の善惡に氣附
 なけまば後日悔ゆること多かるべし固より學
 校の只に數人の為めに設けたるものにはうざ
 とバ一人別に厚き教授を受くることと得と又
 下賤の兒にて行儀らしき者なきにらしねと又
 其中にハ貴人の兒童もらし賢兒もらし畢竟學
 校にて是等の兒童と一緒になり學びて益あり

と云ふの互ひは競ひ合ふの意と引起すことら
 るが故なりされば母親ハ些少の害と論ぜば益
 りの方を採り小兒を學校に通へむると良き
 ことと心得べし
 母親ハ心情の教育と專とし學校ハ學術の教育
 と專としされば小兒の教育ハ母親と學校と共
 々に盡カセざれば完きと得ず學校に入る小近
 き年齢に及もく母親ハ其前用意の為め先つ文
 字の書き方より字體素讀法算術の大意等と教
 え始めハ讀本第一と以て綴字句點のことより

次第に進むべし習字の石盤の上に母親が先づ
書きて兒をとて其上となどらんべし右のこと
出来たまは短き文章と讀ましめ或は暗記せし
むべし其次は問題と出して其答をかきしめ
又は其欲むることと書しむべし斯なせば小兒
の書くと讀むると同時に習ひ得べし又母親の
小兒の意に適ふやりの歌及物語の類と讀み或
は話しこととも暗誦せしめ又は復話せしむべ
し右讀書の替古と共は算術の初歩を教え始む
べし右の學校に入るの前用意にて此年齢を過

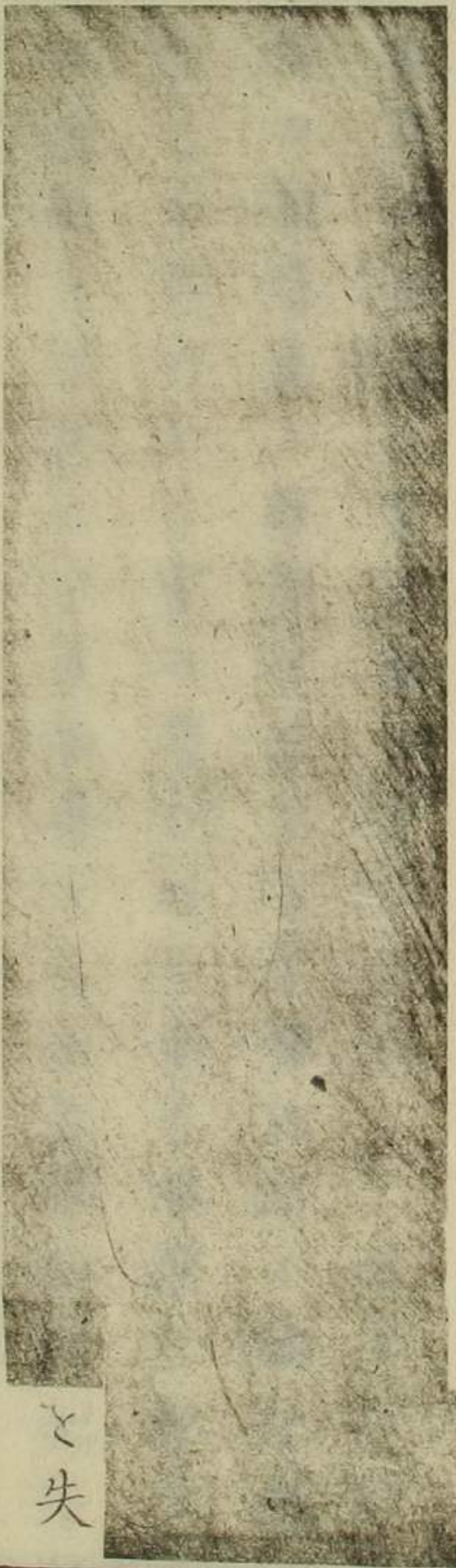
まは學問上のこと即ち博物學及び物理學地理
學の初歩を教之ざらばかゝり勿論是等の小兒
の理解し易き事柄に限り決して高尚の理合と
解くに及ばば地理學と話し地球儀を用ゐべ
し
皆て小兒が能く私宅の教育を受くまは入校し
て他の兒と共に下級の教授を受くるに差支あ
り小學教員も亦右の如き前用意あるものと教
ふるに少しも面倒のことなり故に其學業の進
む方も極めて早し但小學に入るの前用意の男

女の區別なく、小學の下級の男女と別にせざ上級に至るとい教授の方法より學室までも全く分別あり、偕て母親の早朝より小兒の學校に往く用意をなす書物石盤等遺失なく調へ時刻の遅延せぬやうに意を盡し又歸宅せば其衣服及び書物と置くべき場所に置らしめ暫く休息の後ハ其日學ひたる學業を問ひ試むべし是ハ甚ど肝心のことなれば先づ右に言ふ規則通りの事と終らぬらちハ宅外に出でて自由に遊ぶことと許すべからば又母親ハ小兒が學校より受け

たる宿題と小兒の爲めに作りて與ふるハ宜しからず又その兄弟等の代りて作ることも固く禁じても一や他人の力を假りて作るハ非ざるヲ探らば斯くせざれば小兒の爲に損多し○偕て小兒昇級せば次第に母親の教授と要せば尤も學力ある母なれば上級の課業までも助けて教ふることに善し殊ハ其勤惰と督責し書物學具等の整亂と檢察も何時も母親のなすべき處あり偕てその成長きりに從ひ男女によりて心情の教育ハ差異ありと要す男兒ハ専ら智力と

開き、その國俗に慣れ且愛國心を發せりと最上の目的とす、されば國史を教えて國家成立の所由と知らしめ、地理及び物理を教えて、万有の理と知らしむべし。是等の業を助くるは、元來父親のなすべき事なり。但男兒の智力の進む中途の年齢より暴行に陥り、放逸に流るゝの性質あり、又榮利を走るの心あり、尤もこの心の勉勵と起すの助となれば、強て止むるも惡し、けまども程よく制せざれば、輕薄とあり、而して男兒の自身と護り、他人に犯さるゝことなきやう十分の體

力及氣力を造り、且辛苦を堪へて生涯榮譽



と失

はぬこと肝要なり。女兒は自ら他人を抗抵することと教ふるに宜しからば、只柔和順従ふるを以て美性とし、男は右の如く活發の教育と受くべきものをなれ。母親は預てその暴行に陥らぬやうに防くべし。今時粗暴の惡少年多き、畢竟

母親の教育の届らざるに因るなり
諸て女兒の元來性質柔和なりゆゑ母親の男兒
と違ひ教育の上にかまや心意を勞すのみ及ば
ば七八歳の女童の學校へ往くと喜ぶりの多し
其故は新に校内の多くの小兒と共に學ぶること
の面白さに因るなり母親もともに學校に往く
ことと進むべし女の男の如く深き學問を要せ
ず日用普通の學問をたゞしこと肝心なり即ち讀
書算術縫針ぬいの業と專とす
女子の教育は前より云ふ如く博き學問を要せ

どといへども博く諸學に達するものもより益
ありされども只高尚の學問ありして常事の學
問は疎けまは不都合多し沓足袋を編み縫針の
業をよくすれば貧人の女おんなも以て自ら生活を
の資財を得ること易し殊にこの業は女の性質
にあつて適ふものゆゑ學ぶにかたうらび且職業とせ
ざるも徒然と慰むるに極めて良し

○讀書の事

小兒は強て書物と讀ましめ精神の健康を害
ふ又書物と讀み得るの年齢にたるとも初めの

程ハ餘計に讀むことを禁むべし幼少の頃より
餘り書物のみ讀みて運動すること少々なれば
身體の成長を妨げ成年の後有用の人となり
し將と亦餘計に素讀されば其讀方自ら疏畧
ふなりて意味を考ふること愈々淺く一冊の書
を讀了しその事柄を明らかに解を能はば又あ
まこれと種々の書物を讀ましむるの善くらび
古諺は雜讀ハ人と愚ますと云へり
讀書を以て智慧發達の助けとなさんには解し
易く且記憶し易きものを選ぶこと肝要なり小

説の類又ハ奇怪の譚などハとりまづ簡易の
歴史紀行の拔萃各國の風習等を略説せらるもの
甚宜し母親ハこの書物と小兒と授くる前より自
らよく通讀して小兒の質問に答ふべし幽明の
場所并に強き火燈の前は讀書せらるを禁むべし
眼病の源因を引出すことあり
譯者此書を譯せらる方り約ね身體教育と
精神教育の二編を作りこれに脩身の論を
加えて二巻と為さんことと定め上編の序
文は其旨を記せり然るは精神の教育にて

母親の心得 下篇 三九 行泰氏蔵

母親の心得
三
近藤鎮三

既に適當の紙數とあせり今これ又脩身の
部分と加ふまゝの紙數餘計として看者の厭
ふと怖る依て脩身の部の別冊として母親の
心得餘録と名けて他日發行すべく看客序
文の意と違ふと咎むるなま

母親の心得下篇終
其の意と違ふと咎むるなま

明治八年十一月廿日版權免許

翻譯并出版人

濱松縣士族
近藤鎮三
東京本郷弓町二丁目十四番地住

賣弘書肆

東京府下書物問屋
島村利助
馬喰町二丁目

三

